

能登半島地震で甚大な被害を受けた石川県、生き埋めになったペットたちの救助のため、千葉県から石川県輪島市に向かったペット捜索・救助チーム「うくにゃん」の活動報告がSNSで話題を集めたと、関西の新聞社など各種メディアが集まって作っているネットの新聞「まいどなニュース」に出ています。

このペット捜索・救助チームの代表の方によると、生き埋めになっていたのはトイプードルの雄。飼い主の方の家族から救出依頼があり、現場に急行。一階、二階住居は屋根に押しつぶされて全壊。倒壊した家の周りを歩きながら、犬の名前を繰り返し呼び続けると、姿は全く見えなかったものの、かすかに動物の鳴き声が…。運よく待機中の自衛隊の方が二名いらして、その方々にお願いで、倒壊

家屋に隙間を作っていただけ、腹はいになつて中に進入。奥にいたトイプードルにゆつくりと近づいてゆき、左手に持ったペットフードを犬の口元近くに持っていき、犬が鼻を近づけたところを右手で首輪をつかんで、思いっきり引きずり出したのだとか。この間二時間。

助け出された犬の飼い主は八十代の女性の方。この方はすでに神戸の親せきの家に避難していましたが、ペットを家に残して避難してから、一切しゃべらなくなってしまったのだそうですが、犬が無事に発見されたことを聞いたとたん、笑顔が戻り、いつものように

話をするようになったのだとか。ペット捜索・救助チーム「うくにゃん」は、今回犬一匹と猫五匹を救助。チームの代表の方は、被災地でのレスキュー活動を振り返り、「とにかく諦めないことがいちばんです。」と、語られたそうです。

さて、今から六十年以上も昔の一九五七(昭和三十一年)一月二十九日、南極観測船「宗谷」に乗った第一次南極地域観測隊員が、南極の東オングル島に上陸。観測基地である「昭和基地」の建設を始めました。

翌年二月十四日、南極地域観測隊の第一次越冬隊は第二次越冬隊と交代する予定でしたが、「宗谷」は、岩氷に挟まれ、昭和基地への接岸を断念。昭和基地に滞在していた第一次越冬隊員は、小型飛行機とヘリコプターで「宗谷」に撤退。

隊員と苦楽を共にし、重い犬ぞりを引いて人間に貢献してきた樺太犬十五頭は、やむなく鎖につながれたまま基地に取り残されることとなります。小型飛行機やヘリコプターには重量制限があり、人間だけでギリギリだったからです。この時点では天候の回復を待つから、第二次越冬隊員が昭和基地に上陸するつもりだったために、犬たちは鎖につないだまま残されたのですが、結局天候は回復せず、このままでは「宗谷」が遭難してしまうと判断し、二月二十四日、犬を置き去りにし

たまま帰還という、苦渋の決断が下されます。



翌一九五九年一月十四日、第三次越冬隊のヘリコプターから、昭和基地に二頭の犬が生きていることが確認されました。生きていたのは「タロ」と「ジロ」の兄弟。基地には七頭の犬が首輪につながれたまま息絶えており、他の六頭の消息は分かりませんでした。

このタロとジロの奇跡的な生存劇は注目され、語り継がれ、一九八三年には「南極物語」という映画が作られるほどでした。私も劇場で見た記憶があります。タロとジロは残された犬たちの中でも一番若かったために体力もあり、首輪抜けも上手だったようで、極寒の中でもアザラシの糞などの「食料」にありつきながら、何とか生き残ったようです。

ジロは発見の翌年、昭和基地で病死。タロは、一九六一年日本に帰国。北海道大学植物園で暮らし、一九七〇年、天に召されました。

人間の年齢で言うとうと、八十〜九十歳だったそうです。動物の生命力の強さには、本当に驚かされます。一日も早く被災地で、人間と動物の平穏な日々が戻るよう、祈らずにはいられません。「とにかく諦めないことがいちばん」と、動物たちに教えられたような気がしています。(立教小学校校長 田代 正行)